



人一倍の愛情と情熱で芝を育てる

田中 篤史 さん

PROFILE

たなか あつし(門屋在勤・37)
株稲治造園工務所所属のグラウンド
キーパー。大阪府出身。

芝生にかける思い

11月の寒空の下、秋を感じさせないほど青々とした芝生が茂る市内に新設されたサツカーフィールド。通常、芝は冬に茶色くなる。それを見事なまでに青く保っているのが田中篤史さんだ。芝生のグラウンドを管理することをなりたいとするグラウンドキーパーの田中さんは現在、同サツカーフィールドを1人で管理している。季節に合わせて2種類の芝の植える割合を調整することで1年中グラウンドを青く保つことができる。

田中さんは「割合の調整を失敗すると芝生がはげたり茶色くなったりしてグラウンドとして使い物にならなくなる。緊張感は大いだが、その分芝生に愛着も湧き、自分の子どものようにかわいい」と話す。

メイドイン 御前崎

田中さんが現在扱っている芝は日本では珍しい品種だ。国内では御前崎市でのみ育成されている。「従来の芝と違い、うまく育てられるか不安だったが、無事に育てることができて良かった。プロサツ

カーの試合や練習などで傷んだグラウンドは、次の試合までに復旧しなければならぬ。成長や繁殖力が高いこの芝に、御前崎の日照条件を合わせると最高の環境を提供できる」と田中さんは目を輝かせた。

御前崎は最高な土地

芝生づくりにおいて欠かせないのが太陽の光だ。御前崎は全国でもトップレベルの日照時間を誇る。芝の変色を招く雪が降らない地域性も大きな利点だ。雨が降りすぎないことも散水の量やタイミングを計りやすいと田中さんは気に入っている。

「芝生を管理するために人ができることは限られている。最も大事な要素といわれる天候が、御前崎市は最適な環境。それに、芝生だけでなく移住者にも良い地域だと思う。温暖な気候のようにおらからで優しい人が多いし、見渡す限りの海という景色はリフレッシュできて最高」と御前崎の魅力を笑顔で語ってくれた。御前崎の魅力を認めてくれる田中さんの今後の活躍に期待したい。